

メガネ型デバイスを使用した パフォーマンス可視化による 具体的な働き方改革

井上一鷹 Kazutaka Inoue
株式会社ジンス JINS MEME グループ

昨今、働き方改革、生産性向上施策を多くの企業で推し進めている。しかし、それらの施策は、生産性を計る指標がないうえ、個々人の特性に合わせたカスタマイズができていない。また、組織目標である生産性と、個人目標の幸せが紐づく形で施策が定義・運営されていない。そこで、集中力を測定できる JINS MEME を活用し、人事施策の効果を見える化、さらに個々人の特性に合わせ最適施策にするための働き方改革を具体的に推し進めるためのサービスを展開していく中で見てきた、パフォーマンス向上のための自らのデータからの学習するためのインフラの重要性を説く。

KEYWORDS →IoMT →ウェアラブルデバイス →生産性 →働き方改革

1 データフィードバックによる働き方改革 サービスが求められる背景

JINS MEME というデバイスの商品開発～事業開発を数年かけて実施してきた。

その中で現在は、働き方改革という言葉に代表される「人のパフォーマンスの上げ方」に対して、生理データを活用したサービス開発を実施している。

AI が席卷していく世界の中でも、人らしいパフォーマンスを発揮し続けられるように、データでサポートすることを目標にしたサービスである。

ここでは、データをフィードバックすることで、人のパフォーマンスを可能な限り引き上げる方法の事業開発をしている私からの切り口として、現在の社会(特に日本)で求められるパフォーマンスに対する向き合い方に関して、述べさせていただく。

まず、現在の働き方改革の課題についてだが、30年ほど前から、日本人のホワイトワーカーの生産性が低い、という話はずっといわれ続けている。それを違う言葉で

語っているのが、働き方改革である。

しかし、その向き合い方は、本質的に何も変わっていない、というのが現状である。

第二次産業のメーカーの生産活動における改善活動は、いまだに日本はどの国からもベンチマークされ続けるものであることに疑いの余地はない。それに対して、第三次産業におけるそれは、低い状態のままであるが、これには、2つの大きな問題があると考える。

2 問題①：根性論と空気を読め文化

まず、1つ目は、「根性論」と「空気を読め文化」である。

日本人は、「ムリな状態でもムダに頑張る」、これは、子どもの時からスポ根マンガで育っていることから来るのではないかと、思うが、頑張ったことを称賛し過ぎる文化の問題で、効率を考えにくい国民性がある。

また、空気を読むことによって、一人で仕事に集中することに向いていない文化がある。承認欲求が強い現代